平成29年度重点プロジェクト事業（国際学会発表等旅費）報告

35th International Conference on Biomechanics in Sportsにおける研究発表

加藤　忠彦*

はじめに

平成29年６月14日から18日までの期間，ドイツのケルンにあるケルン体育大学にて開催された，35th International Conference on Biomechanics in Sports（第35回国際スポーツバイオメカニクス学会大会：以下，ISBS）の学会大会に参加し，自身の研究成果の一部を発表する機会を頂いた．本稿では，学会大会の様子および発表内容について報告する．

ISBS について

ISBS は1982年に発足した，スポーツ分野におけるバイオメカニスクスを対象とした学会であり，現在では毎年一度，Annual Conference を開催している．学会大会の参加者には，現役のアスリートや，指導者としての一面を持つ研究者，学生も参加しており，競技・指導の現場に則した意見交換が頻繁に行われていた．

会場の様子

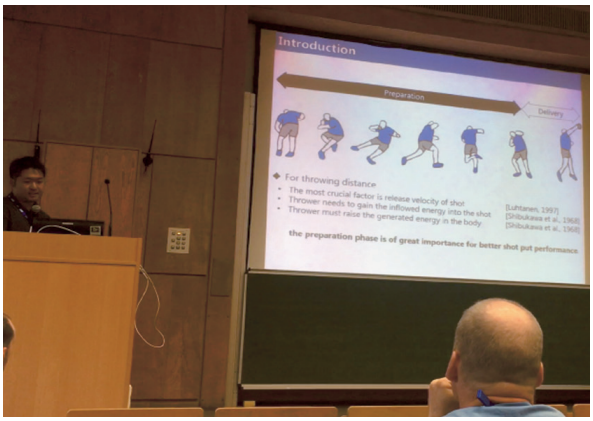
学会大会では，一般発表のほかに Keynote Lecture や Work Shop，Applied Session など，数多くのセッションが設けられていた．興味深いテーマが多くあったが，スケジュールの兼ね合いなどがあり，自分の研究テーマに近い棒高跳に関するセッションなどに参加した．

また，一般発表の多くで，研究成果の還元を Injury Prevention（障害予防）の観点から行っており，競技力の向上以外にもスポーツバイオメカニクスの還元先があることを再認識できた．

研究発表について

ISBS の一般発表のセッションは，競技種目や動作の類似性，その他の共通するカテゴリーなどに基づき分類されており，私の発表は，「Track and Field」の口頭発表のセッションであった．今回の私の研究テーマは，「Kinematic and Technical Factors for Acceleration of Whole Body in Rotational Shot Put Technique」であり，砲丸投・回転投法において身体を加速させるうえで重要となる力学的要因，およびそのための技術的な要因について検討したものであった．発表後の質疑にて，３次元の動作における「回転軸」の解釈や算出方法について，質問や指摘を受け，方法論上の問題点や，限界の提示などの必要性を再認識することができた．

口頭発表であり，自身の英語力で研究成果を伝



筆者の発表時の様子

* 鹿屋体育大学大学院体育学研究科博士後期課程３年

えられるかが不安であったが，他の日本人参加者に助けていただく機会もあり，国内では経験したことのない刺激を受けられ，今後の博士論文の作成や研究活動にあたり，有意義な経験となった．

おわりに

国外での学会発表は今回が初めてであり，非常に有意義な経験となった．しかし，研究力，英語力での実力不足を痛感したので，今後もこのような国際学会に積極的に参加できるように，努力していきたい．

最後に，本学会大会に参加・発表するにあたりご支援いただいた前田明教授および共同研究者の皆様，現地でご助力いただいた永原隆特任助教，本学職員の皆様に厚く感謝の意を表します．